

## 柳井先生の御退官によせて

高根芳雄 (マッギル大学)

2006年3月

私が柳井先生と知り合っただけこれ40年になるのでしょうか。初めて先生にお会いしたのは東大の心理学科3年の時でした。5月祭で態度変化の実験をすることになり、皆で相談して態度測定の結果を因子分析してみようということになったのですが、実際にどうしたらよいのかわかりません。そこで教育心理学科の肥田野先生に御相談したところ大学院にこういう人がいるからと紹介して下さったのが柳井先生だったのです。最初に柳井先生に会いに行ったときは本当にショックでした。会って早々固有値、固有ベクトルは何か知っているかと訊かれたのです。当時私は社会心理学に興味を持っていて固有値の「こ」の字はおろか高校で習った以上の数学は何も知りませんでした。しかし、その時初めて心理学にもこういう分野があるのだということを知ったのです。柳井先生はとても誘い上手で「自分がこんなに面白いと思っていることを他の人も面白いと思わないはずがない」とばかりに誰彼となく自分の研究会に出席するよう声をかけておられました。私も5月祭の御縁で先生に誘われ研究会に顔を出すようになり、次第に計量心理学に心を惹かれるようになりました。この研究会で1番印象に残っているのはHorstの「データ行列の因子分析」という本を毎週一章ずつ解読していったことです。この本は一章毎に100位の数式がならんでいてそれを1つ1つ理解しながら追っていくのが結構大変だったと記憶していますが、最初はちんぷんかんぷんだった私もだんだん慣れてきて数ヵ月後には数式を理解するのが楽しいと思うようになりました。今でも数式の展開が苦にならないのはこの時の経験があるからかも知れません。それから柳井先生は「面白いことを考えた」と言っただけでその場で黒板を使って自分の着想を披露して下さることがよくありました。ところがあまりにも説明のスピードが速いので私にはただちに理解できないことも多く、後になって先生がおっしゃられようとしたことを推測して自分なりに再構築しようとしたことが何度もありました。今ではそれが本当の意味での学習に大いに役立ったのだと思っています。また柳井先生は大学とは創造の場であることを身をもって教えてくださった最初の方でした。それまでの私は知識は持っていたとしてもその知識は創造のためにあるという視点に欠けていました。ところが柳井先生のところでは新しい考えかどうかがまず評価の基準で、何か言うと必ずそれは自分の考えかどうかが訊かれました。大学は誰もしたことがないことをする(考えたことのないことを考える)ところだと知ったのは新鮮な驚きであったと同時に、自分は大変なところに来てしまったものだという感慨に打たれました。その後私は北米に渡り、やがて計量心理学の研究を自分の生涯の仕事とするに至りましたが、やはり大学生時代に柳井先生とお会いしたことが自分の人生を決める上で決定的であったと思われまふ。これはまさに「運命的」出会いだったと言う他はありません。柳井先生に人生を「変えられた」方は大勢いらっしゃると思いますが、私もその一人として先生がこれからも今まで通り若い人にインスピレーションを与え続けて下さることを願ってやみません。先生とのお付き合いは40年間絶えることなく続いていて、今でも帰国すれば必ず薫陶を受けに伺い、また線形数学の問題で自分の手に負えない問題に出くわすと何時も御相談するのは柳

井先生です。そのやりとりの中からいくつかの共著論文が生まれたことを付記してこの小文を閉じさせていただきます。